第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域
第3章　田老地域における支援体制

神田より子

はじめに

東日本大震災における田老地区の被害は、平成24年11月6日現在で死亡届出者136人、死亡認定者45人で、合計死者数は181人にのぼり、宮古市全体の死者の合計517人の3分の1という多数の被害が出た。また家屋倒壊数は全壊が1千550戸、大規模半壊が48戸、半壊が77戸、一部破損が16戸で合計が1千691戸となる（『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～2011・3・11～2013・3・10』宮古市　2013年）。万里の長城とも呼ばれたx軸の防潮堤を津波が襲い、田老の街中の平地部分の住宅や商店街のほとんどが破壊された。

そうした中で津波襲来以降、多くの方々が被災に立ち向かい、困難を乗り越えて、今ようやく災害公営住宅に入居し始めた方々も出てきた。

本論はそうした津波の被害に立ち向かっていった方々の日々の行動と記憶を聞き取り、記録したものである。ここでは主に田老地区における支援体制として田老総合事務所の動き、震災後に分散して避難していた方々を1か所に集めて、よりよい支援をするために決まったグリーンピア三陸みやこでの避難所生活と、その支援体制について述べてゆく。

1　田老総合事務所の被災時とそれ以降の取り組み

震災当時は田老総合事務所長だった**上屋敷正明さん**（昭和26年生）から、2012年8月20日と2015年9月3日に話を伺った。上屋敷さんは現地対策本部長もされていて、現在はグリーンピア三陸みやこ専務取締役の職にある。

当時上屋敷さんの部下だった鳥居利夫課長が「平成23年3月11日震災　田老地域振興課鳥居課長対応綴」（以下「鳥居綴」と略して用いる）という詳細な記録を残している。そこで本論では上屋敷さんの許可を得て、必要に応じて3月12日から3月31日に至る「鳥居綴」を引用して詳細を補足することとする。ただし個人名は省略形を用いる。

震災当日とそれ以降の取り組み

3月11日は議会があり、私は市役所にいたが、午後2時46分に大きな地震があった。議会では議長に閉会せねばと、一度皆席について「閉会」の宣言があり、2時50分頃にすぐに車で走った。田老総合事務所に戻るため、国道45号線を佐原まで上がって、樫内まで行けば歩いてでも帰れると思った。加工団地のあたりで津波に遭ったらアウトだったが、車の流れはスムーズだった。3時15分頃には事務所に着いた。すぐに、水門を閉めたか、避難者がどのくらいいるかなどの状況を聞いた。道の駅の国道事務所の防災倉庫の鍵があったので職員に確認させた。

事務所に戻って10分くらいしてから、ラジオの情報で津波の高さを聞いたら、3メートルから5メートルということだったので、漁港はやられると思った。

総合事務所は小高い場所にあるが、玄関から見ると、津波が防潮堤を越えて寺の方に迫ってきたので、高い所まで逃げた。玄関前の駐車場は、下が車庫になっているが、その駐車場の10センチくらいまで水が上がった。

津波が引いた後、課長たちに集まってもらい、避難者はどこに何人避難したか、地域振興課、農業、林業、商業観光課の職員の確認を指

写真1　2011年3月15日　田老庁舎付近

示した。また、飲み水の確保を神田地区の涌田商店や道の駅で行うこと、水道の状況確認などを指示した。

被災を免れた神田地区の堰代茂一さんが、何か手伝うことがないかと聞きに来てくれたので、おにぎりと水を依頼した。来なければこちらから行こうと考えていた。11日はおにぎり1つを2人で分け合って食べた。水はすぐに引けたが、その日に行けることができたのは神田地区だけだった。役場からお寺の山を通り、三鉄の線路を伝って大平地区に出た。公用車が向こうで立ち往生していたので、それで連絡を取ろうと思ったが駄目だった。夜になって、職員2人を宮古まで派遣したがこれも駄目だった。宮古の市役所では情報が届かないため、「田老は全滅した」と言っていたという。

被災当日の避難場所は、総合事務所、常運寺、田老第一小、宮古北高校、熊野神社だった。乙部地区の青砂里で山火事が発生した。その山に逃げていた人たちは、山を越えて和野と真崎入口を経由して道の駅に避難した。

私の自宅は常運寺のすぐ下で、道路より1メートル、更に基礎が50センチ高かったが、床上70センチの浸水だった。家の中は泥だらけだった。下水管からも泥が上がった。しばらくして、床下全面の乾いた泥を取って炭を敷き詰めたが、何度掃除をしても細かい粒の泥が出てきた。基礎が大丈夫かは不明である。

消防団

3月11日、最後に事務所に戻ったのは夜中の11時ころだった。背中に籠を背負って歩いて行き来した。灯油、軽油の確保も大変だった。重機が現場事務所にあったので、国道を開削するように指示した。加藤俊郎さんが来て手回しの給油機を取りに行ってくれた。遺体捜索もあり、田老診療所の黒田先生に検案してもらった。

この日にやったことは、それぞれの担当に話したが、報告のないものは話しっぱなしのままであり、次から次といろいろ進めたので、指示の時系列については記憶がない。

被災当日の夜は、被災を受けた地区に何人が住んでいたか調べさせた。避難所に避難した人数は約千人。被災前の人口は約2千人だったから、宮古で働いている人を含めても約千人足りない。この人数が不明だと大変だと思った。生存者の人数を数えて、不明者の名簿を作る必要があった。道路が通れないので人力でやらなければならなかった。

当日の夜、事務所に消防団が集まり、どこに何がある、水をどうするか等について話し合った。下水処理場に浄化装置がある、神田の水をポリタンクに持って来ようと話していたところに分団長が数人来て、火事が出ていて大変なことになる、今は消火できないとの報告があった。延焼してくるかもしれないと緊張した。山火事はずっと延焼していた。火事での死者は出ていなかったが、二十九、三十分団の分団長が「だめだ」と言って来た。山火事は田老一中の近くまで迫り、煙が流れて来た。消防団は食い止める自信がなかった。荒谷の沢で食い止めなければこちらに回って来るという。

翌3月12日は、岩泉消防団が水50ケースとおにぎりをたくさん持って、消火の応援に来てくれた。

「鳥居綴」には以下のようにある。

「3月12日　田老一小　ヘリ可能　北高避難者　100人
三鉄線路付近、神田橋付近まで自動車可能、そこから線路で総合事務所へ
田老一小、田老一中生徒は全員無事
避難者　田老総合事務所　田老一小　常運寺　1500人分炊き出し
水が必要
山林火災　青砂里～和野　乙部　荒谷　熊野神社
田老総合事務所　炊き出し1500人分、飲料水　同、オムツ　20人（各サイズ）
三鉄は田老駅までは運行可能と思われるが、その先には民家の屋根が乗っている
総合事務所の上の駐車場や、田老一中校庭までかん水

熊野神社の山林火災は、田老一中側への延焼の危険あり、田老総合事務所等の避難者を北高に移動させるタイミングを見ている
田老総合事務所、田老一小、常運寺、北高の避難者用ストーブの今夜の石油がない
熊野神社周辺山林火災は、田老一中側に拡大中
田老総合事務所から田老地区の平坦部は一部を除き全壊
総合事務所から人工透析1名　緊急搬送を要する、田老一小がヘリ着可能」

神田地区からの食料の応援

私が最も強く記憶に残っているのは、神田地区に住んでいる堰代茂一さんだ。被災した当日5時ごろ、水がない、食べ物がない、被災者のために何ができるか考えていた時、彼が「何かできることがあったら言ってほしい」と来てくれた。それで、食べ物、飲み物がほしい、できるだけご飯を炊いてほしいと頼んだ。

彼の祖父は、昭和8年の津波の際も神田から来て手伝ったことがあった。そのため、自分も何かやらねばと思って来たという。総合事務所へは、道路がすべて瓦礫で埋まっていたので、三鉄の線路を伝い、常運寺の墓地を抜け、歩いてきたらしい。

どのように食べ物を確保するか、外には知らせることができずに切羽詰まっていた時だったので助かった。神田地区の人達がみんなでポリタンクに水を入れ、おにぎりを背負いかごに入れて持って来てくれたので、それぞれの避難所に配った。堰代さんは末前、青倉、養呂地、小田代地区まで声をかけてくれた。

翌12日の朝6時頃にもおにぎりを届けてくれた。被災者は1千人を超えていて、この食料だけが頼りだった。神田地区では集会所や屯所でもご飯を炊いていたらしい。いよいよ3日目には米が底をついたとやってきたが、他からの救援も始まったので大丈夫と話した。

実のところ、米は宮古方面からは入ってこない。摂待地区にお願いしたが、田んぼを所有する家の多い下摂待地区も被災していた。農協からの救援物資がようやく届いたので、神田方面にも配ることができた。末前からも米がないと言って来た。県の振興局からも届いた。14日朝に宮古市役所に頼んだが田老ばかりではないと言われた。最初に支援してくれた地区に回す米が重要だった。自衛隊が来てから1人当たりの米の量がわかり計算できた。

そのうち道の駅からも苦情が来た。総合事務所では2、3日の避難所と考えていたのだが、そのまま数十人も残っていたのだった。

3月15、16日になって自衛隊が来て、18日あたりから炊き出しが始まった。

避難所での避難者数の把握

被災当日は、避難所の人数を確認し、各課長は職員の確認が終わり、診療所長、保育所長、中学校の教職員もみんな無事だと聞いて安心したが、数日後に子供の遺体が上がったという話があった。この子供を保護者が迎えに来て、連れて帰り助からなかったと後から聞いた。小学校は高台にあったし、ここへ逃げていれば大丈夫と思っていた。

翌日朝8時には避難者数のだいたいの把握はできた。被災当日に約1千４００人の把握をした。下摂待の人たちは、水沢の集会所に避難していた。小田代山荘に避難した人たちは把握できないでいた。樫内集会所の人たちの中には、宮古方面から来て田老までたどり着けずに泊まった人たちもいた。

被災者の名簿はその夜午前0時にはできたので、翌朝から台帳を作れた。しかし、被災地域の人口は2千人を超えていたのに、千人近くを把握しきれていなかった。それをどのように把握するかが問題だった。不明者を探すために、3、4日後に各地区の自治会長を集め、自治会ごとに確認をしてくれるように頼んだ。田老にいるのか、出稼ぎに行ってないかなどの情報を3月22日ころまで集めた。

時間がかかったり、何十年も行方不明の人がいたりと、正確には掴めなかったが、おおよその人数を把握できた。そのため行方不明の遺体が出てきたときは、年齢や性別などからある程度は判断することが

できた。「そんな気がする」といった伝聞は不明の者とし、確実な者だけを記載した。寺でも情報を得ていて、それを受けて確認作業ができた。生存者名簿と行方不明者は誰々という情報は、3月13日ころには張り出すことができた。

「鳥居綴」には以下のような記述がある。

「3月12日　宮古北高校　15：30
　体育館（約250名）、格技場（同　80名）収容
水は神田公民館給水できる。炊出し（神田）350食　分団長　野崎茂さん
米1ぴょう、ガソリン　40L、発電機　2台借用、毛布、燃料
大平コミュニテイセンター　ガスボンベを炊き出し用で使用、特に看護を用する者はいない。鉄砲の流出届け　3名
11：30　自衛隊ヘリを消火活動に要求
11：40　北校で切腹（切迫カ）流産の妊婦がいるので救急車を要請
3月12日の避難者数
庁舎　250名、寺　150名、小学校　150名、北校　350名、グリーンピア　400名、ふれあい荘　160名、
　北校を避難所　炊き出しの手配、死体処理の問題
　車輌手配、北校、ストーブ、ガソリン　現場事務所から2缶、フトン　末前伝承館、
　灯油　一中から抜く
3月13日　水沢へ毛布20個配布、経由　役場、ふれあい荘（済）
　ガソリン　北校、連絡車、灯油　全ヶ所」

消防、自衛隊、米軍の応援

2日後くらいに盛岡から消防の応援が来てくれた。自衛隊は3月11日には滝沢から宮古市千徳までは来ていたという。田老に入ってきたのは3月12日。13日から国道の開削に入った。その時期に三王閣の解体工事をしていた会社も重機を出して手伝ってくれた。

3月12日の夜から、警察、自衛隊、消防署、総合事務所職員が毎日夕方1時間の打ち合わせをして、作業の状況や緊急事項などを確認した。これは4月まで続けられた。

田老は、ほぼ自衛隊がやってくれた。遺体の捜索まで引き受けてくれ、側溝の中まで探してくれた。

3月12日には、宮古消防本部でガソリンの配給があるというので、畑、有芸、田代経由で取りに行った。灯油の配給も道路が通るまで、三鉄の線路を使ってポリタンクを担いで運んだ。三鉄が田老まで通るのは早かった。町内の道路が開いたので、三鉄を走れるようにしようとなった。県北バスは国道や市道が通ってもまだ動かなかったので、食料の買い出しに行くために三鉄を動かす必要があった。自衛隊が、線路上の瓦礫を撤去し、電気の通電状況のチェックをして3月中には動いた。

消防団、消防署の人たちにも食料を届けた。本部からも食料が来たので、それも回せたが、自力で調達するのは無理だった。県外から応援に来てくれた消防署員には食料を届けなければならなかった。自衛隊は自分たちで完結できるので貰えないと言った。

厚木基地から来た米軍のヘリコプターが小学校の校庭に何度も降りた。2～3日に1回の割で来て食料と衣類を届けてくれたが、衣類は大きくて使えなかった。英語のできる職員が話したが通じない。そこで自衛隊に話してもらった。狭い校庭に大型ヘリコプターが降りるので困ったが、自衛隊が直ぐに対応してくれた。

「鳥居綴」には関係機関の対応状況の記載があるが、ここでは宮古関連のみ引用する。

「3／12　関係機関の対応状況
【消防】◎緊急消防援助隊
　秋田県隊―宮古・田老・山田　6：00宮古で活動開始
　指揮2、消火4、救助6、救急8、後方支援13、33隊
　6：41　増隊（9）―宮古に派遣を決定
◎県内広域応援　17隊

宮古―盛岡（指揮1、救助1、救急1）、
【DMAT】消防学校に第二災害医療拠点を設置（日赤）
参集チーム　県内20、日赤9
＊久慈・宮古・大船渡・高田病院は受け入れ不能
【警察】災害派遣
宮古署―東署18名、紫波署16名、山梨22名
広域緊急援助隊
県警ヘリ　5：30　花巻空港発、陸前高田から宮古まで偵察
検視官の派遣　宮古20名により沿岸各市町村で6時00分より開始
検視予定場所　宮古市（宮町体育館）
【自衛隊】宮古（102名）5：30　救助活動
滝沢（駐屯地）（299名、284名、265名）岩手駐屯地で準備中　6：00　陸自八戸　八戸から宮古まで偵察（ハンディカメラ）
海上自衛隊　護衛艦15隻で海上からの救助活動中
【海上保安庁】海上における救助・救出活動中
【救助等の要請】宮古市　マース避難者（15人）の救助―自衛隊
宮古病院に傷病者を集め、盛岡までのヘリ搬送―調整中
宮古病院へのDMATの派遣（1：15）―調整中
田老町　市街地の火災消火
人工透析患者（1）搬送―宮古消防の地上隊が対応（6：49）
＊このほか多数―調整中
【緊急物資支援】
宮古病院　毛布（100人程患者が濡れている）」

道路の開削

急患はヘリコプターを小学校に降ろして運んだ。三鉄の線路は命の綱だった。夜、電気の無い中、唯一の道となった。この道と神田地区の人たちの助けが無ければ、裏山の清水を飲む以外に何も無かった。三鉄の線路には瓦礫が覆いかぶさっていたが、ここだけは通ることができた。

主な道路を通すため、11日の夜は、現場事務所の人たちと打ち合わせをした。三王閣の解体をしている業者の重機を使い、12日から道路の開削を始めた。小山田電業や田老町漁協の協力も要請した。漁協にタンクローリーがあることがわかり、燃料を補給しながら作業が進められたが、最初、タンクローリーの鍵が見つからず焦ったことがあった。

有芸の前川林業の機械で、宮古北高校から45号線までの道路を開いてもらった。国道45号線の長内橋から川沿いに少し遡ると現場事務所があり、倉庫には大型除雪車があった。近くの出光給油所に行けば灯油も軽油もあるので、それらを燃料に確保した。国道を給油所まで通れるように作業を始めたが、遺体が発見されると、警察への通報と遺体の収容、その周辺にほかの遺体がないか確認するために時間がかかった。

給油所で燃料は確保できたが、停電していたので給油機は使えず、灯油は手回しで、他は足踏み式の機械でくみ上げた。足踏み式は3人して交代でやったが疲れてしまって続かない。車1台を満たすのも大変だった。しかし、燃料があれば何とかなると思い公用車には入れた。自衛隊が到着する前から民間の人たちは先立って協力してくれた。

3月13日は、自衛隊との打ち合わせがあった。自衛隊が南側から入って来たので、北側は現場事務所で開削すると決めたが、小山田電業の協力もあったもののなかなか進まなかった。北側から総合事務所までは瓦礫が多く、鳥居課長からは1週間以上かかると言われた。

もう一度、瓦礫の少ない場所を検討して、小学校側を迂回しながらも1週間以内に道路を確保することができた。15日頃になると、出光スタンドまで開削され、燃料を確保することができた。開削は重機で

瓦礫を押し上げながら、消防団に見守られながら作業した。自衛隊は慣れているのではかどった。

カラスが集まってくると『あそこには遺体があるのでは?』『あそこには遺体が7人いた』などの噂話が出て来た。

震災後の1～2週間の出来事は、頭からすっぽり抜けている。忘れてしまいたいという思いもあった。これまで、何回も話してほしいと言われたが話していない。

瓦礫の搬出場所も問題だった。想像以上の瓦礫の量だった。防潮林は県有地だったので、県振興局の許可を得て使うことができたが、個人の畑まではみ出して積み上げた。長内川の上流の現場事務所と学校給食センターの空き地、河川敷も使った。

「鳥居綴」には以下のような記述がある。

「3月13日　自衛隊①　施設　啓開作業　南から
同　②　消火　30名、啓開捜索　10名、重機　1台
消防団　山火事　捜索につく　大下
イタイ（遺体カ）（箱）（棺桶カ）、米の手配
自衛隊施設部隊が南からはいる
6：00　ケガ人　①Oさん（39才）（骨折?）右肩、右足、左腰、意識OK
②Oさん（野原2）　左下あご出血、右頭部打撲、意識OK
7：45　宮古消防署救急隊が到着
人工透析患者　1名（川向　Yさん）を宮古病院まで搬送
22：00　北校より避難者の報告　北校側の計測と調書の数が合わないが「約260人」とのこと、300でカウント済み
3月14日　自衛隊480人（北海道）
①9特連3大隊　大槻　3／12～3／14
②2戦車連隊（280人）3／15～早ければ3／14から
③387施設中隊　佐藤三佐
④防支援隊（大曲）10：20頃　基地はグリーンピア」

震災対策本部との連絡

宮古市役所本部から、田老総合事務所長はなぜ来ないと言われたが、そんな余裕はなかった。田老の情報が全くないので、知らせるように言って来たが、時間をかけてそこまで行くより、今やるべきことは現場だと考えた。本部から出向いて情報を取りに来てほしかった。1週間くらい経ってから行って話をした。

田老総合事務所の職員は60～70人いるのだが、被災当日はそれぞれの管轄の場所にいて、事務所内には30人くらいしかいなかった。残っていたのは、農業課と林業課で、彼らも本庁に戻り、人数はもっと減った。働ける職員が減り、職員が足りないと本部に話した。

私と鳥居課長は、平成23年度が定年退職の年で、あと1年を共に頑張ろうと言っていたところだったが、この惨事が起きた。周囲からいろいろなことを言われ、どうしてよいかわからなかった。

「鳥居綴」3月12日
「10：00　橋本商店付近で生存者2名救出
10：15　真崎タクシー　3名救出　1名救出
10：20　Kさん母　救出
行方不明者　3月13日　14：00　受付
向山　Yさん、Mさん（宮古に出かけている時間帯だったかもしれない）
（依頼者）小林Yさん（自宅か北校にいます）
小林Sさん、Nさん（逃げているところを見た人がいる）
（依頼者）　Kさん、（自宅は流れたので別宅にいます）
行方不明5人①Yさん（川向）、②Hさん（摂待）、③Tさん（同）
④Hさん（小堀内）、⑤Yさん（同）、⑥Kさん（?）

＋8人
3月13日　14人（累計　19人）」

総合事務所の中

グリーンピア三陸みやこを避難所として運営するイメージはできていた。だが、具体的なことはボランティアの人たちに教えてもらった。毎週月曜日に班長に集まってもらって、情報提供や要望を聞き取った。鳥居課長は、元々土木技師で、整理することは得意だった。また、資料は取っておくのだとも言っていた。田老に関係した新聞の記事は別の臨時職員に指示してすべて取っておくようにした。鳥居課長には、総合事務所から出ないで瓦礫除去のことについてやるように言った。

防災システムの構築

防災システムをどう考えるかのマニュアルはあったが、農業課は食糧の供給のみで、本部は全く機能していなかった。田老総合事務所には自家発電装置があったので、毎日軽油を補給して発電し、ＮＨＫのテレビから情報を得ていた。市町村合併の時に田老の議員が、宮古市の対策本部に自家発電がないのはおかしいと言っていたが、それが本当になった。

被災当日の夜、田老診療所の黒田先生が、透析の必要な患者がいるので医療機関に運ばなければと言った。人工透析の患者は、ヘリコプターを小学校の校庭に降ろして宮古病院まで運んだ。酸素ボンベは自家発電があったので大丈夫だった。

ボランティア

ボランティアの人たちの一部は、自分たちの食料も全部車に積んできて、現地には迷惑をかけない体制で来てくれて有り難かった。だが、多くのボランティアの人たちは、食事から宿泊の提供まで求めてきた。大勢で来た人たちほどそうだった。被災直後の混乱している時に来たボランティアの世話には負担を感じた。時間がたって社協を通じて来た人たちは、こちらの体制が整った後だったので問題はなかった。

マスコミ

3月は津波研究者、市の対策本部、マスコミなど大勢が押しかけて来て、その日誰が来たか、もらった名刺に日付を入れていたが、間に合わなくなった。忙しい中をマスコミが来るので煩わしかった。現場が混乱している時に来られると仕事がストップしてしまう。こういうのは、代表取材をして同じ記事を流すことも必要だと思った。こちらも、同じ話をしていても、メモを見て話しているのではないので、微妙に内容が異なってくる。そのため、どちらが正しいか後で言われる。記者は、来たからには何か記事を持って帰りたいから、こちらの事情を無視して聞いてくる。

マスコミの人から、福島では原発事故で大変だから、こちらは忘れられてゆくと言われたときはショックだった。こちらも大変なのにと思った。

遺体処理

遺体のことは困った。田老常運寺の火葬場は老朽化していて連続して使えないし、宮古には道がふさがって行かれない。国道が通れるようになってからは、岩泉まで行かなければならなかった。遺体は、警察の管轄なので警察に任せたが、場所は市町村で決めろと言われた。

昭和８年の津波のイメージがあって、神社の境内に安置することを考えていたが、宮古北高に安置することを警察が言ったらしく、校長は不服を言って来た。

小堀内の遺体は北高まで運ぶことはできない。遺体の検案をする医師も足りない。個人の家に置いておくわけにもいかず、グリーンピアのホテルも別組織だったのでだめだったが、クラブハウスに置かせてもらった。遺体は小堀内漁港で亡くなった人たちだった。

摂待地区の人たちの分は岩泉の火葬場を使った。遺体は火葬しないと安置場所がなかった。

常運寺での火葬は、住職が葬儀屋と相談して進めていた。3月下旬には、北高の安置所の遺体数も少なくなったので、安置所を公民館の体育室に変更し、さらに数が少なくなって、宮古の千徳体育館に移した。

拾得物の中で重要と思われたものは、総合事務所の金庫に入れた。全体が落ち着くまでは、法律論より、今、どうするかで決めてゆかなくてはいけなかった。

2　グリーンピアでの3月11日以降

一方震災当時、グリーンピアではどのような動きがあったのか。当時㈶グリーンピア田老の専務取締役をしていた**赤沼正清さん**（昭和15年生、乙部、現テニスコート仮設）に2012年8月13日、19日に話を聞いた。また総合事務所と同じように、グリーンピアでも3月17日から7月24日までの『避難所連絡帳』（以降は『連絡帳』と略す）という記録が残っていた。以下ではこの記録も参照しながら見てゆくことにする。

グリーンピアの3月11日

グリーンピアは、昭和60年に「財団法人グリーンピア田老」として開業された。それを平成17年3月31日に国の年金福祉事業団から田老町が取得し、平成17年6月6日に宮古市との合併で所有権が宮古市に移った。平成18年3月31日には㈶グリーンピア田老の直営管理となり、宿泊部門（ホテル）は観光のプロに任せるということで、東京の西洋フーズコンパスグループ㈱に移った。この間、宮城・岩手の大地震があり、風評被害が多かった。それもあって、西洋フーズ㈱との契約は9年だったが、2年くらいで辞めたいと申し出があり、結局この会社は3年6か月で引き上げていった。地元の人を経営に入れないとだめだということで、地元と、「グリーンピア瀬戸内」の社長さんに経営を手伝ってもらうことで、平成21年11月20日に「㈱グリーンピア三陸みやこ」を設立、平成22年4月1日にリニューアルオープンして再出発を果たした。

そして、平成23年3月11日、大震災がおきた。大災害を受けて平成23年7月31日で「㈱グリーンピア三陸みやこ」との委託契約は解除になった。こうしてグリーンピアは運営のすべてを㈶グリーンピア田老が行うこととなり、8月1日から新たにスタートすることとなった。7月末までいたスタッフの多くは「㈱グリーンピア三陸みやこ」の契約解除に伴い、解雇となっていたため、新規にスタッフを募集した。希望があれば再雇用もしたのだが、「職員を解雇した」と新聞に厳しく書かれたりもした。希望者以外は仮設住宅から募集したり、ハローワークを通して被災者を集めた。

避難者への対応

3・11の時は、グリーンピアにいた。宮古市の林業課の人たちと、平成23年の植樹のための樹種を決めるため、現地調査をしていた。グリーンピアに市民の森を造成して3年目だった。現地を見て戻るときに地震がきて、道路も揺れて車も揺れた。この地震だと津波が大きくなると言って、その後の会議を中止して役所の人たちはすぐ帰った。

私の自宅は国道45号線沿いにあるローソンの近くから海岸部に入った乙部地区なのだが、現地で対応するためグリーンピアに残った。当時ここは指定避難所になっていた。ホテル、アリーナ、体育館のどことはっきり決まっていなかったが、寒いのでホテルを避難所にしようと思っていた。ホテルに着いてから津波が3㍍と聞いたが、避難者の受け入れ準備を始めた。徐々に人々が集まりだした。当時ホテルは「㈱グリーンピア三陸みやこ」が営業責任者だったので、宿泊棟以外の1階と2階部分を避難者のために使いたいとお願いして、許可を取った。3月9日にも地震があり、危ないと考えた人は早く避難していた。

未だかつてない揺れなので、私もすぐに判断した。山田町や横浜などからの宿泊客もいた。大きな地震で電気は切れていたが、ホテル棟には自家発電があった。また、重油の暖房も大丈夫だった。寒かったので暖房をつけたが、揺れがあるたびに客を外に出した。水もたくさんは無かったので、トイレは1か所にして、たらいを置いてその水で

各自が処理をしてくださいとお願いした。

避難者はホテルロビーと廊下、大広間に案内した。従業員の宿舎には非常用の寝具があった。三王閣にあったものを引き取って災害用に取っておいたのだ。最初は寒いので2枚敷いていた人もいたが、避難者が増えて1枚ずつになった。11日は４００名くらい、12日からは1千名位の出入りがあった。

食べ物は団体客の宴会が予定されていたので、これらの材料もすべて提供してもらった。食料は11日から13日までは間に合ったが、14日の朝からの分は十分になかった。外部との通信がすべて途絶えていたので、13日の夜中に営業本部長と救援物資の要請をしに田老総合事務所へ向かったのだが、国道が遮断されていて行けなかった。三鉄のトンネルを通って行こうとしたが、11日からの火災によりトンネル内に煙が発生して通れずに戻ってきた。14日早朝、水沢地区の一部はドコモが通じていると聞いたので、そこまで行き、最後の望みをかけて知り合いの役所職員10人くらいに片っ端から電話をかけた。そのうち繋がったのは2人だけだった。結局、14日の朝は食料が足りず、子供と身体の弱い人のみに配り、大人は我慢して欲しいと頼んだ。そんな中で近所の人が食べ物やおにぎりを持ち寄ってくれた。また、岩泉の消防隊がおにぎりを運んできてくれた。

14日の11時頃、宮古の新里給食センターから山の方を回っておにぎりが届いた。よそへ回す予定をこちらに回してくれたらしい。うれしさと安堵で、嗚咽してしまった。これは今でも忘れられない。

寺や小学校の避難所ではここよりも大変で、北高校も大変だったらしい。樫内ではウニまで出してくれた人がいたらしい。摂待地区では自宅が壊れなかった人たちも、水も電気もないのでここに来た人たちもいた。

「紙コップや割り箸は捨てないでください」、「皆でがんばろう」と毎朝放送したりした。この頃は皆まだおびえていた。

病人、けが人への対応

避難してきた人の中には、波をかぶってずぶ濡れの人が4、5人いたので、専務室に入れた。妊婦さん、ケガ人も運ばれて来た。13日にこちらに現地入りしてきた秋田（鹿角・大曲・横手など）の救急隊と、元宮古広域消防の金澤純二さんと相談して、岩泉の済生会病院に運んだ。岩泉の病院の柴野先生が、治療やその先の手配をしてくれて、妊産婦2人と岩泉で治療してもダメな骨折などをした6人はその後、盛岡の医大に入院させたようだ。金澤さんがギプスをして送った人もいる。Oさんはしばらく様子をみたが調子が悪く済生会病院へ送った。Mさんは体調を崩して救急車で運んだ。済生会からは、決められた時間に運んでほしいと言われたので、午前1回午後1回グリーンピアのシャトルバスで岩泉まで運んだ。45分で着ける。岩泉済生会病院の柴野先生とは以前からつながりがあった。柴野先生が田老病院に勤務していた当時、私も一緒に働いていたことがあった。医療的な受け入れ体制は、これで整った。

社協田老センターのデイサービス利用者らもここに避難してきた。カラオケ室や畳の部屋は重症者や病気の方の部屋にした。そして、看護師やヘルパーの資格を持った人や経験者に彼らを看てもらった。救護の部屋には赤十字の看板をかけた。田老診療所の先生は当初田老総合事務所にいたが、数日後から北高校を拠点にあちこちの避難所を巡回診療した。石川県の日赤も「対策本部はここか」と入ってきた。「現地対策本部は田老総合事務所だ」と言った。すでにグリーンピアでは医療的な受け入れ体制ができ始めていたので、「こちらの看護師らの指示で動いてくれ」と言った。彼らは半日くらいで帰ったが、グリーンピアには無線機もなくて大変だと田老総合事務所に話してくれた。

これらはすべて田老総合事務所を通さず、現場対応だった。ただ、最も心配したのはグリーンピア職員の中では災害対応などの経験者が自分一人きりで、他は火災の避難訓練くらいしかやったことのない者ばかりだったことだ。

組織体制

組織体制ができたのは15日頃だった。当時会社のトップで責任者の宍戸氏と、社協の藤島氏と私の3人で組織体制を作り上げた。その3日後に営業部長も東京出張から帰り4人体制となった。㈶グリーンピア田老の牧野さん、山田さんは主に総務班。給食班と輸送班は佐藤健太郎さん（元田老町役場職員）が兼務した。彼は田老給食センターと田老保育所長経験者だった。防災点検と施設班は畠山さん・山本さん（㈶グリーンピア田老）、そして水道技術者の菅原究諾さん（元田老町役場職員）。救急班は元宮古広域消防の金澤純二さん、看護師経験者の吉水さん、柾屋さん、山本さん、朝倉さんらにお願いした。物資班は、ボランティアセンターを含めて、社会福祉協議会のデイサービスメンバーだった看護師、介護士、ケアマネージャー、指導員などにお願いして、ここで物資の受け入れ、配分も担当してもらった。そして、「㈱グリーンピア三陸みやこ」の職員の方たちは、フロントでの対応や食事の準備、掃除などを避難者の人たちと一緒になってやってもらった。このようなメンバーで3月31日まで現地対応した。

外部との対応

震災当初は、田老総合事務所にあった現地対策本部との連絡が全く取れなかった。そんな時、自衛隊は、早く来てくれた。北海道の自衛隊は15日に岩泉方面から入ってきた。第1から第3隊で彼らはアリーナに入ってもらった。自衛隊が来てからは、その通信網を使って連絡を取った。この間、炊き出し、支援物資、不足物に関しては自衛隊が動いてくれた。自衛隊にはガソリン、重油、灯油を依頼した。ガソリンスタンドも皆流れたので、緊急車両のみ入れた。もっとも重宝したのが水と自家発電用の重油だった。

電気は15日の夕方には点いたので水をポンプアップできるようになり、17日から風呂の準備もでき入浴させた。自衛隊にも水を供給できるようになり、自衛隊のタンク車で一般家庭にも配給できた。自衛隊は食事と水の供給をやってくれた。その当時は、アリーナの駐車場が自衛隊の車でいっぱいになった。その後、被災者がアリーナに移ることが決まると、自衛隊は体育館に移り、体育館に支援物資が来るようになるとまた移動していった。最後は、現在の仮設保育所のあたりに野営本部を置いた。自衛隊は邪魔にならない場所に点々と移った。

ご飯の炊き出しと食材の準備は自衛隊が行い、副食はグリーンピアで担当した。それらは総合事務所まで運ばれ、そして各避難所へ自衛隊が運んだ。水も自衛隊が運んでくれた。水は摂待川から取水しているので、管が破裂していないかチェックさせた。施設が大きいので、故障のことを考え、あちこち点検させた。ガスだけは漏れていると大変なので、専門家にチェックしてもらってから使った。私は主にフロントにいた。役所から何が足りないか、避難者は何人いるか、と聞かれるが、昼はいなくて夜だけ来る人もいた。他の避難所で物がなくなってこちらに来る人もいる。紙コップや箸も不足してきて、捨てずにマイコップ、マイ箸にして使ってもらった。歯ブラシ・歯磨き粉の要請をしたが、役所からは、それは二次物資だから後になると言われた。外からは泥靴で入ってくるので、感染症予防のためフロントですべて履き替えさせた。医者と看護師が来てからもこのことを心配していた。そのため現地へ行ったときのヘドロのついた泥靴は玄関でシャットアウトした。トイレも履き替えさせ、風呂も検査した。インフルエンザが心配だったので手洗いを励行させ、その結果マスクの人がいっぱいになった。3月の途中からは、1階と2階が避難所で、3階と4階は仮診療所にした。

4月以降のグリーンピアと田老

4月からは被災者の内陸避難が始まり、その経費は県が払った。グリーンピアは県の制度により利用できた。4月3日から人が減り始めたので、グリーンピアは被災者用住宅として使えた。そこで施設を居住者に貸し、自炊にした。仮設には生協から配給があった。

8月1日から営業許可を取り、スタッフ募集をした。そのため職員を解雇したと新聞に書かれたりもした。こちらでは希望があれば再雇用もした。こうしてグリーンピアは宮古市の管理となった。平成24年

3月31日からはビジネスホテルとしてスタートした。従業員は希望者以外は仮設から募集した。ハローワークを通じて被災者を集めた。パートで働く時間編成などもやった。

今回の東日本大震災では10㍍だった堤防を14・7㍍にする予定があるが、地盤沈下が50㌢ある。今回の津波では堤防があるから大丈夫と考えて、避難行動がゆっくりだったり、「おらはいい、ここさで死ぬから」という人がいた。

田老の乙部地区1だけで28人亡くなった。妻は確定申告にゆき、津波が来たと知り、家から車で45号に出たが、波が見えたので、歩いて近くの山に登って山を分け入って逃げ延びた。車で逃げた人は亡くなった。乙部2（野原）では20人亡くなった。役場の近くの人たちはすぐに山へ逃げて、亡くなった人はいない。

『連絡帳』は3月17日から記載が始まっている。この日は３５０名の人数が記録されている。翌日には４００名とあり、余白には「移動が激しい」、「昼は作業、夜泊まり」とある。10人くらい病人ありと記され、この日は医大のボランティアによる診察があった。19日には供給ルートができて重油による風呂が開設され、自衛隊の炊き出しが始まった。赤沼さんの確認によると、自衛隊は田老地区１２００名分の食料をグリーンピアと共同で準備したい意向で、数日中には宮古市から食材を調達できる予定だという。役場、小学校、常運寺、北高などの避難所の食事もまかなうことを検討している。こうして19日から自衛隊による炊き出しが始まった。しかし21日の記録には自衛隊と赤沼さんとの連絡がなされず、今日炊き出しができるか把握できないという。また30日をめどに田老地区の避難者をグリーンピアに統合するという案が出てきた。そのためこの日に総務課と田老診療所のドクターが来て、どの部屋に何人置くかの検討がなされた。

3　避難所をグリーンピアに集中

上屋敷さんの話の続きを聞こう。行方不明者の数は、まだ何百人といた。避難者名簿に載せている人たちもあちこちに動いていて、避難者の人数が増えてしまった。　そんなこともあり、避難所を1か所に集めることに決めた。

3月15日から20日にかけて、避難所に職員を配置するように災害本部から指示されたが、職員が足りない。本部からも田老に出せる人数はないという。それで、グリーンピアの赤沼さんと相談をして、避難所をグリーンピア1か所に集めることにした。避難所では常に人の移動があるので、毎日避難所に行って人数を確認した。

3月20日ごろまでに、他地区に避難していた人たちも田老に戻って来て、各避難所のまとまりも出てきた。

内陸への一時避難者もいた。県による割り当てで、希望者は県内の保養地の安比、八幡平、花巻などに一時避難をした。それらの費用、1泊5千円の金額を県が負担した。

グリーンピアのホテルを使用した被災者は、4月3日から7月31日まで宿泊した。

当時のグリーンピアは、財団経営で専務が赤沼正清さんだった。ホテルは委託していて、別会社が運営していた。そのため、被災当初はホテルを避難所にする話はなかった。そのため、はじめは、ホテルの各部屋を避難者用に使えなかった。そこで赤沼さんは会社と話し合った。グリーンピアに避難した人たちに関しては、赤沼さんに任せる以外に道がなかった。

この間の事情について3月24日、25日付けの「鳥居綴」では以下のような記述がある。

「3／24グリーンピアの扱いについて
災害救助法に基づき国から1泊5千円出す
グリーンピアの宿泊等も同じとする（各体育館に住んでいるため）
グリーンピアの場合はアリーナにする。宿泊等は弱者（乳幼児を抱えている家族など）優先とする。2ヶ月
避難所は期限を切って入居

北高・お寺・ふれあい荘・小学校の順で異動させる。
自炊している人は食材をグリーンピアに取りに行く、イヤであれば避難所へ。」

《グリーンピア三陸みやこへの避難所設置について》

(1) 設置の目的

平成23年3月11日の大津波による被災者を収容している田老地区の避難所等を、グリーンピア三陸みやこに一元化することによって、田老地区の避難所の適正かつ効率的な運営を図る。

＊宮古地区でも、同様に各地区でも設置している避難所の集約化をすすめる。

(2) 田老避難所の状況（3月24日現在）

避難所名	避難者数	適用
田老総合事務所	36	
田老第一小学校	87	
宮古北高校	218	
常運寺	74	
GP三陸みやこ	248	
ふれあい荘	40	
小田代山荘	9	
樫内集会所	65	
摂待集会施設	10	
合計	787	

(3) 避難所の内容

①設置場所　グリーンピア三陸みやこ「パシフイックアリーナ」

＊宮古地区においては、避難所の集約化を進めるとしても、当面学校の体育館や公共施設等を継続使用せざるを得ないため、それとのバランスを取ることに加え、収容人数もかなりの数が見込まれることから、グリーンピア三陸みやこのパシフイックアリーナを使用する。

②設置期間

平成23年4月1日（金）～平成23年5月31日（火）

③収容者の範囲と収容期間

収容者は、原則として田老地区の避難民を対象とし、収容期間は避難民が仮設住宅や自らの手配による住宅等へ入居するまでの期間とする。

④収容予定人数　700人程度

⑤避難生活に必要な物資等の準備

市が設置する避難所であることから、食料、水、寝具、医薬品、テレビなどの避難生活に必要な物資については、市が準備するものとする。

《宿泊施設の活用による被災者の一時収容について》

1　事業の目的

高齢者だけの世帯や障がい者のいる世帯などが、仮設住宅や自らの手配による住宅等へ入居するまでの間一時収容する施設を、市内の宿泊施設の協力を得て設置する。

2　設置施設

・浄土ヶ浜パークホテル
・休暇村陸中宮古
・グリーンピア三陸みやこ

3　設置期間

各宿泊施設とも2ヶ月間

4　収容者の範囲と収容期間

収容世帯は、被災者用住宅（市営・雇用促進住宅）の申込基準に準じた世帯とし、収容期間は仮設住宅や自らの手配による住宅等へ入居するまでの期間とする。

（被災者用住宅申込基準）

区分	世帯状況
A	高齢者（65才以上で2名以上）だけの世帯

B－1　乳幼児（3才以下）又は妊婦のいる世帯
B－2　中学生以下の子供が3人以上いる世帯（平成23年4月時点）
B－3　70才以上がいる世帯

5　収容予定人数
各施設との協議により決定する。

6　その他
詳細については、施設等との協議により決定する。」

避難所の引っ越し

3月25日頃には、避難者の不安がピークになった。被災後1週間くらいは、各々が大変なことだらけで余裕がなかったが、2週間くらい経つとさらに不安が増して、また、別の感情が出て来て自殺者も出た。緊張がポンと切れた頃が問題だった。みんなが一緒にいると、自分だけじゃない、誰もが家族を亡くしたり家をなくしたりだから頑張れる力になる。

総合事務所にはいろいろな情報が入って来た。当初は、グリーンピアのアリーナや体育館を避難所にしようという話が出た。アリーナは自衛隊の宿舎だったが、自衛隊に話に行ったら、自衛隊はもともと野営の予定で来ていたので、すぐに撤収できると言ってくれた。

3月25日に田老にいる人たちすべてをアリーナに集めようと決めた。そして、佐藤農業課長と2人で各避難所に説明に歩いた。各避難所では、自治組織ができつつあり、また、動くことに反対の声もあった。だが、みんなが同じ場所にいて共通の情報を得ることができると説得した。長期になると学校も始まるので、皆さんいっしょにやりましょうと承諾をしてもらった。これが一番いい方法だと確信していた。

3月28、29日の2日間で、自衛隊の車を使って移動を終えた。

グリーンピアでの避難生活

グリーンピアのアリーナでの避難は、人が多すぎてだめだとの声があったが、班を8つにして班長も決めて対応した。結果として1か所にしたことはよかった。

手伝ってくれる人も決めた。今はゆいとり工房の代表をしている大棒レオ子さんにいろいろと説明をしたら理解してくれ、皆に指示をしてくれた。食事の配分も、時間や班の順番を決めてうまくいった。

前にグリーンピアのホテルで働いていた船越博之さんには、臨時職員として戻ってもらい、避難者が配膳から食後の食器洗いまでできるように指示をしてもらった。

800人もいると協力的な人もたくさんいてうまく動いてくれる。総合事務所の職員だけではうまくできない。職員は昼4人、夜2人常駐した。

アリーナで分けた班は、被災前の自治会ごとに、さらに、家族の人数によって居住サイズを決め、床に線を引いて割り当てた。一方、ホテルの方は、1部屋4人、ベッドでしか休めない人や70歳以上の高齢者、障がい者とその家族を宿泊させようと決めた。

ホテルに泊まっていた人が、別の場所に移動していった後には、アリーナから高齢者や診療所の黒田先生が薦める人を入れるようにした。

アリーナも余裕が出て、だんだん落ち着いてくると、皆と一緒の方がよいと、ホテルからアリーナに戻ってくる人も出て来た。皆と一緒の方がより安心感が出るのだと思う。気候もだんだん暖かくなって、アリーナも生活がしやすくなってきた。

人々の出入りを把握するために、アリーナとホテルに外出者名簿を作った。入口が1か所なので把握できた。また、夜にいろいろなことが起きることを考え、警察の巡回や9時までは消防団に赤色灯を回してもらい、警備員を対角線上に2人配置した。

9時を消灯にして、避難所では飲酒をしないというルールにしたが、明かりが消えると、あちこちからプシュッという缶を開ける音が聞こえた。集まって酒盛りをされると迷惑をかけるが、1人で飲んで寝てしまうのならよいことにした。特に大事に至ることはなかった。

アリーナの中に、女性のための更衣室や洗濯干場用のテントも用意

した。最初はそんなことは考えつかなかった。

落ち着いてくると、仕事に出かける人も出てきた。早朝に出かける人達は、避難者で申し出てくれた食事のボランティアの人たちが、残りご飯でおにぎりを作ってくれ、それを持って出かけた。

アリーナには、初めは段ボールの仕切りもなかったが、皆から要望が出されて対処した。

洗濯は、クラブハウスに洗濯機をずらりと並べて使ってもらった。細かなことはいろいろあったが、深刻な話はなかった。トイレに手ぶらで入っても出るときは、袋にトイレットペーパーをいっぱい詰めて出てくる人もいた。自分の所有物がほしかったのだと思う。

最もよかったのは、グリーンピアがあったことだ。千人以上の人が入れたこと、同じ田老の人が集まったこと、そこである種の安心感があった。人数が少ないと、自分たちはどうなってしまうか心細くなってしまう。

『連絡帳』には、4月9日のグリーンピアアリーナには377名、ホテルには245名の記載がある。アリーナには田老地区の消防団が夜は5名、朝からは20名の記載があり、警戒態勢に入っていたことがわかる。6月11日には528人だった人数が、15日には激減した。アリーナには150人、ホテルには130人となり、合計280人ということが自衛隊への確認でわかった。20日には37人となり、7月1日には23人、記載最終日となる24日には10名だった。

グリーンピアアリーナの避難所生活

吉川敦子さん（看護師、字小林）から2012年8月18日に話を伺った。今は生活指導員と准看護師を兼務している。当日は田老診療所勤務で、夜勤明けで休みだった。

3月11日

宮古病院からの帰りにガソリンを満タンにして、家に帰り、着替えをしていた所に携帯が鳴った。そのうちにグラグラ揺れたので、ストーブを消して、ラジオを取りに行った。父は家にいなかった。子供を預けていたので児童館に行った。児童館では先生がパジャマを着せてくれていた。「連れて帰りますか」と聞かれ、「はい」と答えて、そのまま山に登り待機した。ここには10人以上の人がいた。ここでは川の様子が見え、海の音が聞こえる。

息子がおばあちゃんと孫4人を連れて盛岡に行っていた。小学生の孫を迎えに行こうか迷ったが、行く気になれなかった。父も行かなくて良いと言って山にいた。

ヘリコプターが2機飛んでいた。聞いたこともないドスンという音がした。大平の山の向こうから土煙が上がって、神田川を瓦礫が遡ってきて、津波とわかった。「昭和8年のときより大きいね、田老が全滅だね」と話していたら、後ろの川から車が流れてきて、家の方からも水が上がってきた。しばらくして薄暗くなり、「大丈夫そうだね」と家に帰った。

父が小学校に孫を迎えに行った。そこに息子たちが帰ってきて、ふれあい荘に避難した。

看護師として

翌日着替えを取りに家に帰ろうとしたら、看護師さんが呼んでいた。「診療所の患者さんが来るから」と言うので「では助けるか」と言って、そのときから2人で看護が始まった。ふれあい荘は自家発電で電気が点いたが、痰の吸引器などが遠いので大変だった。近くの退職した看護師の遠藤さんがふれあい荘に避難していて、一緒に看護をしてくれた。近くの人が診療所から薬を拾ってきてくれて助かったが、皆が薬をほしがって大変だった。「すぐに出せない」と何回言ったがわからない。離れ小島の状況で、街のことはわからなかった。たまに先生や看護師が来てくれて、彼らがパイプ役のような感じだった。カルテもなかったが、先生の頭の中には患者さんのことがインプットされていた。自分の薬をもって逃げた人もいたが、ほとんどの人は先生の記憶が頼りだった。2日目くらいから重傷の人が亡くなった。吸引が必要な人

にも心臓マッサージをしたがだめだった。

総合事務所には山本先生がいて看取ってもらった。家族が迎えに来たときは無事だったのに、次に来たときは息を引き取っていたりした。連絡が取れず大騒ぎをして家族が迎えに来た。看護をしていても何も無かった。床ずれなどどうしようと言っていたら、ガーゼや消毒薬を届けてくれた。栄養液がなくなったらどうしようと言っていた。食事はふれあい荘にある食材を使って出してくれた。ふれあい荘に物資が届いたのは5日目。

診療所がグリーンピアへの移動

3月25日にグリーンピアへ移動になった。それまでは川井診療所などに依頼したり、ふれあい荘に預けた。3月26日からグリーンピアで診療を始めた。黒田先生が事前に見に来た。点滴が必要な入院患者は3階の部屋で行った。派遣の医師が交代で来てくれた。田老出身の山本栄一先生は東京にいたが、自分で運転して最も早く駆けつけてくれた。ローソンのすぐ上の田老診療所の真上が山本先生の実家だ。

国境なき医師団の先生方は1週間交代で来てくれた。この医師団の中には何か月もいてくれた先生もいる。沖縄の先生はスタッフの人たちの心理状況を診てくれた。私は家族が無事だったので、自分の状況は問題なかったが、あの人が死んだとか聞くと、皆自分が関わった患者さんなので、つらかった。ふれあい荘は避難場所ではなかったが、助かった。風呂は自衛隊が来るまでできなかったが、川に行って足は洗えた。

自衛隊が来てから国道45号線は通れたが、個人の車は通れなかった。家があっても店に物がなくて食料に困った。ふれあい荘では入所者以外にも避難した人たちの分も食事を作ってくれたのでありがたかった。

一番大変だったのは不眠、便秘、血圧。「看護師さん薬はないか、まだか」と聞かれ、何度説明したことか。診療所の患者のことは何とかわかるが、他所へ行っていた患者のことはわからない。その間を縫って、医師は死体検案をしたが、一人一人わからないので、赤沼さんが一緒に付き添った。家族の人は死体を見ても「絶対違う」と言い張る人もいた。警察も物のような扱いだったので、反感があった。黒田先生に言われて納得することが多かった。グリーンピアの廊下の狭い所で処理していた。グリーンピアがなかったら寒い中でどうしたか考えると怖い。グリーンピアは合併して赤字だったので、解体費用を作るために貯金をしておけとまで言われていた。

9月の地震が予兆だったと思う。このとき大平の水門を閉めたが、閉まらないことがわかり、このまま3月11日が来たらもっと大被害になった。津波に流されている人を見た人たちは、山から見ていても何もできず、「助けて」という声がずっと残っているという。

【引用文献】
宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～2011・3・11～2013・3・10』宮古市　2013年

【引用資料】
「平成23年3月11日震災　田老地域振興課鳥居課長対応綴」
グリーンピア版『避難所連絡帳』